連載・青少年健全育成シリーズ　第250回

「未来へとつなぐ写真」

１９９７年、滋賀県立琵琶湖博物館で開館１周年の企画展が開催されました。「琵琶湖アルバム」と題されたその企画展は、１９５０年から60年代と今の暮らしや自然の変化を写真でたどり、身近な自然とのかかわりや自然と共生していた時代の様子をふりかえる、というものでした。

企画展で展示された、「さん橋の人びと」と題された昭和30年代の一枚の写真には、早朝、湖辺のさん橋で水を飲む人、米をとぐ人、顔を洗う人など、子どもから大人までの日常が撮影されています。撮影者は、後世に記録を残そうという使命感からではなく、日常生活の何気ない風景をありのままに撮ろうとしたのかもしれません。

この写真を見た人からは、さまざまな情報が寄せられたといいます。湖辺では当時、水をくむのは早朝、洗濯は日が高くなってからなど、お互いが水を汚さぬよう気を配りあっていたこと、またご飯粒などを餌とする魚がたくさんいたことなど。改めて語る必要のないと思われるような日常生活の記憶が一枚の写真がきっかけとなりよみがえるのでしょう。時代の一瞬を切り取ったにすぎない一枚の写真にも、そのときの自然や人の暮らしの様子だけでなく、自然と人との関わりのありよう、当時を生きた人びとの想いまでもが写し込まれているようです。

今、琵琶湖博物館だけでなく、全国で地域の写真を集め、記録として残そうという地道な取り組みが行なわれています。それぞれに規模や方法にちがいはあっても、これらの取り組みに共通しているのは、たんに昔をなつかしむということだけではありません。地域の変わりようを見つめ、これからの地域とのつきあい方、あるいは将来を生きるヒントを探りたい、という思いです。

こうした地域の写真を活用して、都留市では市立図書館と都留フィールド・ミュージアムが連携して「谷の町・史の里企画資料展」が開催されてきましたし、小中学校でも地域を学ぶ授業の実践が行なわれるようになりました。言葉では伝わりにくい過去の自然や暮らしも一枚の写真から豊かにイメージを描くことができます。子どもたちにとっても家族や地域のみなさんとともに具体的に当時に思いを寄せ、今、そして未来を考えるきっかけをつくる効果があるようです。

ミュージアム都留でも、地域の写真を蒐集する取り組みを始めたという記事が今年の「広報つる４月号」にありました。もともと写真は個人的なもので提供するのは難しいという性質があります。しかし何気なく撮影された今の風景でも、50年、１００年後の人びとにとっては時代を振り返る貴重な手がかりとなるでしょう。一枚の写真は、さまざまな思いや記憶を留めた未来への手紙と言ってもいいかもしれません。

カジカ突き（昭和33年撮影）。『奥隆行写真コレクション』（都留文科大学地域交流研究センター）より

毎月第１日曜日は「家庭の日」
毎月第３日曜日は「青少年を育む日」です。

青少年育成都留市民会議編集委員

広報「つる」広告募集！

あなたのお店の広告を広報つるに載せてみませんか？
広報「つる」は、都留市内の各家庭に配布されています（10,500部発行）ので、多くの方の目に触れます！

問合先：行政管理課　秘書広報担当

広告料金

掲載場所	印刷色	金額 / 枠	備考
裏面	カラー	20,000	２カ月掲載
内面	２色刷り	10,000	２カ月掲載

掲載月は、①1・2月②3・4月③5・6月④7・8月⑤9・10月⑥11・12月の６パターンとなります。
掲載状況につきましては、下記をご参考としてください。
また、詳細につきましては、ぜひお問い合わせください。

広　告　掲　載　欄

広　告　掲　載　欄